

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

第一章 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふうに川だと言われたり、乳ちちの流ながれたあとだと
言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知しやうちです
か」先生は、黒板こくばんにつるした大きな黒い星座せいざの図の、上から下へ白くけぶった
銀河帯ぎんがたいのようなどころを指さしながら、みんなに問といをかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジョバ
ンニも手をあげようとして、急いそいでそのままやめました。たしかにあれがみん
な星だと、いつか雑誌ざっしで読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎
日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなことも

よくわからないという気持ちです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのです。

「ジョバンニさん。あなたはわかつていられるでしょう」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立ってみるとうはつきりとそれを答えることができないのです。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすくすわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になつてしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよつく調べると銀河はだいたい何でしょう」

やっぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、
「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上がったままやはり答えができませんでした。

第一章 午後の授業

先生は意外いがいなようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、急いそいで、

「では、よし」と言いいながら、自分で星図せいずを指さしました。

「このぼんやりと白い銀河ぎんがを大きないい望遠鏡ぼうえんきょうで見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

ジョバンニはまっ赤かになってうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼めのなかには涙なみだがいっぱいになりました。そうだ僕は知ぼくっていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士はかせのうちでカムパネルラといっしょに読よんだ雑誌ざっしのなかにあったのだ。それどころでなくカムパネルラは、その雑誌ざっしを読よむと、すぐお父さんの書齋しよさいから巨おおきな本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒くろな頁ページいっばいに白しろに点々てんてんのある美うつくしい写真しゃしんを二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘わすれるはずもなかったのに、すぐに返事へんじをしなかったのは、このごろぼくが、朝あそにも午後ごごにも仕事しごとがつかなく、学校がっこうに出てももうみんなともはきはき遊あそばず、カム

パネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネルラがそれを知ってきのどくがつてわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるなら、もっと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光がある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮かんでいるのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模様をこらんなさい」

第一章 午後の授業

先生は中にたくさん光る砂すなのつぶのはいった大きな両面りょうめんの凸レンズとつを指さしました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな私わたしどもの太陽たいようと同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽たいようがこのほぼ中ごろにあつて地球ちきゅうがそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレンズの中を見まわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄いうすのでわずかの光る粒つぶすなわち星しか見えなくてしょう。こつちやこつちの方はガラスが厚いあつので、光る粒つぶすなわち星がたくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるという、これがつまり今日の銀河ぎんがの説せつなのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまの星についてはもう時間ですから、この次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河ぎんがのお祭りまつりなのですから、みなさんは外へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本やノートをおしまいなさい」

そして教室じゅうはしばらく机つくえの蓋ふたをあけたりしめたり本を重ねかさねたりする音

が、
いっばいでしたが、
まもなくみんなはきちんと立って礼れいをすると教室を出ました。

第二章 活版所

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネ
ルをまん中にして校庭の隅の桜の木のところに集まっていました。それはこ
んやの星祭りに青いあかりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らし
かったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。
すると町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたり、ひの
きの枝にあかりをつけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲がってある大きな活版所にはいつて靴

をぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついて、たくさんの輪転機がばたりとまわり、きれて頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子にすわった人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね」と言いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向こうの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次へと拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う」と言いますと、近くの前、五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷たくわらいました。

ジョバンニは何べんも眼をぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

第二章 活版所

六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入れた平たい箱はこをもういちど手にもった紙きれと引き合わせてから、さっきの卓子テーブルの人へ持もつて来ました。その人は黙だまつてそれを受け取うつてかすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉とびらをあけて計算台のところに来ました。すると白服しろふくを着た人きがやっぱりだまって小さな銀貨ぎんかを一つジョバンニに渡わたしました。ジョバンニはにわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると、台の下に置いた鞆かばんをもつておもてへ飛とびだしました。それから元氣よく口笛くちふえを吹きながらパン屋やへ寄よつてパンの塊かたまりを一つと角砂糖かくざとうを一袋ふくろ買いますといちもくさんに走りだしました。

第三章 家

ジョバンニが勢いよく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口のいちばん左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いがおりましたままになっていました。

「お母さん、いま帰ったよ。ぐあい悪くなかったの」ジョバンニは靴をぬぎながら言いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうとぐあいがいいよ」

ジョバンニは玄関を上がって行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の

室^{へや}に白い巾^{きん}をかぶって寝^{やす}んでいたのです。ジヨバンニは窓^{まど}をあけました。
「お母さん、今日は角砂糖^{かくざとう}を買^かってきたよ。牛乳^{ぎゅうにゅう}に入れてあげようと思^{おも}って」

「ああ、お前^{まえ}さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さん。姉^{ねえ}さんはいつ帰^{かえ}ったの」

「ああ、三時ころ帰^{かえ}ったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母さんの牛乳^{ぎゅうにゅう}は来^きていないんだろうか」

「来^きなかつたろうかねえ」

「ぼく行^いつてとつて来よう」

「ああ、あたしはゆっくりでいいんだからお前^{まえ}さきにおあがり、姉^{ねえ}さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置^おいて行^いったよ」

「ではぼくたべよう」

ジヨバンニは窓^{まど}のところからトマトの皿^{いし}をとってパンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰ってくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」

「だって今朝けさの新聞に今年は北きたの方りようの漁りようはたいへんよかったと書いてあったよ」

「ああだけどねえ、お父さんは漁りようへ出ていないかもしれない」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄かんごくへはいるようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持ってきて学校へ寄贈きぞうした巨おおきな蟹かにの甲こうらだのとなかいの角つのだの今いまだってみんな標本室ひょうほんしつにあるんだ。六年生じゅうねいなんか授業じゅぎょうのとき先生せんせいがかわるがわる教室きょうしつへ持もって行くよ」

「お父さんはこの次つぎはおまえにラッコの上着うわぎをもつてくるといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪口わるくちを言うの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決けつして言いわない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちょうどおまえたちのように小さいときからの友達ともだちだったそうだよ」

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中とちゆうたびたびカムパネルラのうちに寄よった。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなってそれに電柱でんちゆうや信号標しんごうひょうもついていて信号標しんごうひょうのあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油せきゆをつかつたら、缶かんがすっかりすけたよ」

「そうかねえ」

「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゆうまだしいんとしてゐるからな」

「早いからねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しっぽがまるで箒ほうきのようだ。ぼくが行くと鼻はな

第三章 家

を鳴らしてついでくるよ。ずうつと町の角^{かど}までついでくる。もつとついでくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜^{からすうり}のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚^{こんばん}は銀河^{ぎんが}のお祭りだねえ」

「うん。ぼく牛乳^{ぎゅうにゅう}をとりながら見てくるよ」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸^{きし}から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ」

「もつと遊^{あそ}んでおいで。カムパネルラさんといっしょなら心配^{しんぱい}はないから」

「ああきつといっしょだよ。お母さん、窓をしめておこうか」

「ああ、どうか。もう涼^{すず}しいからね」

ジョバンニは立つて窓^{まど}をしめ、お皿^{さら}やパンの袋^{ふくろ}をかたづけると勢^{いき}よく靴^{くつ}を

はいて、

「では一時間半^{はん}で帰^{かえ}ってくるよ」と言^いいながら暗^{くら}い戸口^{とぐち}を出ました。